

詩篇140篇

指揮者のために。ダビデの賛歌

《詩人を陥れる者》

- 1 主よ。私をよこしまな人から助け出し、暴虐の者から、私を守ってください。
- 2 彼らは心の中で悪をたくらみ、日ごとに戦いを仕掛けています。
- 3 蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。〔セラ〕
- 4 主よ。私を悪者の手から守り、暴虐の者から、私を守ってください。彼らは私の足を押し倒そうとたくらんでいます。
- 5 高ぶる者は、私にわなと綱を仕掛け、道ばたに綱を広げ、私に落とし穴を設けました。〔セラ〕

《激しい訴え》

- 6 私は主に申し上げます。「あなたは私の神。主よ。私の願いの声を聞いてください。
- 7 私の主、神、わが救いの力よ。あなたは私が武器をとる日に、私の頭をおおわれました。
- 8 主よ。悪者の願いをかなえさせないでください。そのたくらみを遂げさせないでください。彼らは高ぶっています。〔セラ〕
- 9 私を取り囲んでいる者の頭。これを彼のくちびるの害毒がおおいますように。
- 10 燃えている炭火が彼らの上にふりかかりますように。彼らが火の中に、また、深い淵に落とされ、彼らが立ち上がれないようにしてください。
- 11 そしる者が地上で栄えないように。わざわいが暴虐の者を急いで捕らえるようにしてください。」

《神への信頼》

- 12 私は知っています。主は悩む者の訴えを支持し、貧しい者に、さばきを行われることを。
- 13 まことに、正しい者はあなたの御名に感謝し、直ぐな人はあなたの御前に住むでしょう。

138篇より続く八つの「ダビデ詩篇」の第三。「ダビデ」という名前を冠するところには、詩篇編纂者のいくつかの意図が込められていると思われます。神とダビデとの関係の豊かさを描くこと、ダビデが人生の中で嘗めた様々な辛酸を振り返ること、ダビデ的王による世界統治を期待することなど。ダビデの人生は、一般人ではなかなか味わうことのない試練と栄光で満ちていました。その両極のうちに現れた神の恵みを描き、読者が経験する数々の試練に照らし、最終的には神との関係の中で栄光に至ることを約束しているのでしょう。

1～5節では、詩人の敵対者が様々に言い換えられています。「よこしまな人」「暴虐の者」「悪者」「高ぶる者」と。6～11節の中では、「私を取り囲んでいる者」「そしる者」が加えられます。彼らが詩人に何を行っていたのかは想像するほかありませんが、「心の中で悪をたくらみ」「日ごとに戦いを仕掛け」「蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があり」「私の足を押し倒そ

うとたくらんで」「私にわなと綱を仕掛け」「道ばたに綱を広げ、私に落とし穴を設け」と言われているところから、詩人を欺いて罠にかけようとしている様子が窺えます。

聖書登場人物の中で実際に罠にかけられかけた人として、ネヘミヤを思い起こしてみてもよいでしょう。彼は、捕囚後の神殿再建を導いていましたが、多くの妨害に遭いました。

- ・ サヌバラテとゲシムは私のところに使いをよこして言った。「さあ、オノの平地にある村の一つで会見しよう。」彼らは私に害を加えようとたくらんでいたのである。そこで、私は彼らのところに使者たちをやって言った。「私は大工事をしているから、下って行けない。私が工事をそのままにして、あなたがたのところへ下って行ったため、工事が止まるようなことがあってよいものだろうか。」（ネヘミヤ6:2-3）
- ・ 私がメヘタブエルの子デラヤの子シエマヤの家に行ったところ、彼は引きこもっており、そして言った。「私たちは、神の宮、本堂の中で会い、本堂の戸を閉じておこう。彼らがあなたを殺しにやって来るからだ。きっと夜分にあなたを殺しにやって来る。」そこで、私は言った。「私のような者が逃げてよいものか。私のような者で、だれが本堂に入って生きながらえようか。私は入って行かない。」私にはわかっている。今、彼を遣わしたのは、神ではない。彼がこの預言を私に伝えたのは、トビヤとサヌバラテが彼を買収したからである。彼が買収されたのは、私が恐れ、言われるとおりにして、私が罪を犯すようにするためであり、彼らの悪口の種とし、私をそしるためであった。（ネヘミヤ6:10-13）

邪魔者を排除するためにカネで人を買収し、自らは手を汚さずに計画を遂行するということは、現在でも行なわれていることです。詩人が信頼してきた人が札束をちらつかされて心を翻し、裏切りに転ずるといったことがあったのでしょうか。そして、根も葉もない噂が立てられ、不利に陥られる。

6～11節には、激しく神に訴えて祈る詩人の姿があります。その祈りの内容に注目すると、罠を仕掛ける者が自ら仕掛けた網にかかるよう求めていることが分かります。「私を取り囲んでいる者の頭。これを彼のくちびるの害毒がおおいますように」（9節）、「燃えている炭火が彼らの上にふりかかりますように」（10節）。迫害者に対して悪意をもって返すのではなく、彼自身が行なった結果がそのまま頭上に降りかかることを求めているのです。神が動いてくださるのであれば人は自ら手を下す必要がないことを詩人は知っていました。このところから読者は多くの教訓を学ぶことができます。悪意には悪意を、悪口には悪口を、暴力には暴力を……この負の連鎖はどこまで続くのでしょうか。争いは積み重なるほど原型が見えなくなり、元々どっちに原因があったのかが判別しにくくなります。最初からその歯車に乗らないという選択肢もあり、それこそが知恵なのです。

12～13節には、もはや敵対者の呼び名はなく、神と詩人の関係のみが残されています。詩人は自らを「悩む者」「貧しい者」「正しい者」「直ぐな人」と呼び、社会においては自分が弱者であることを認めています。しかし、あらゆる力を駆使して詩人を攻撃してくる者も、神の御手の中では無力であることを彼は知っていました。助けを求める祈りは、このように賛美と信頼の告白で締めくくられる傾向があります。苦しみは一時的に神と自分との関係を見えなくすることがありますが、神は私たちの霊の眼を開き、常に共にましますことを思い起こさせてくださいます。そして、苦しみを通してしか知り得なかった神との交わりの深みへと導いてくださるでしょう。信じる者にとってはすべてのことが益とされるのです。